令和５年度　小規模多機能型居宅介護「サービス評価」　総括表

法人名	特定非営利活動法人 楽	代表者	柴田　範子
事業所名	ひつじ雲	管理者	工藤　一枝

法人・事業所の特徴	ひつじ雲は、「人格の尊重」「生活の継続性」「社会参加」「自主性の向上」を理念としています。利用者一人一人が、その方の持っている力を発揮しながら過ごせるようにお手伝いしていきます。しっかり食べるということを始め、生活の中での動作ができるだけ続けられるように、その方にあった方法で体力作りをしていきます。 近年では、地域のなかでお一人暮らしの方も多く、必要な時は、生活全般に関わり支援させていただく事が多くなっています。また、法人設立以来地域と繋がるような活動をしてきました。これからも、地域とのご縁が繋がり続けるような活動を行っていきます。

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民･地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援ｾﾝﾀｰ	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	１人	人	３人	人	１人	１人	人	３人	人	９人

項　　目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A．事業所自己評価の確認	勤務期間が長い職員が多い。自己評価の９個の評価項目は、自己評価の段階で自ら一年間取り組んできたことの振り返りになる。できたと評価する項目も多いが、できていない点も多数上がってくる。できない事実を把握することは冷静にできるが、改善点を意見として挙げる事が少ない傾向にある。経験でクリアしていくことも多いのだが、できていない項目が例年同じような内容なので、常に問題意識をもって意見を出し合える事業所にしていきたい。定期的な意見交換の機会を今以上に作っていく。	利用者の方々の、「～したい」の実現にむけて、その方の力が引き出せるような支援をするという思考ができてきている。そのための情報共有に関しては、常に基本にかえり話し合いの機会を持って行く。令和６年２月より介護記録のツールを変更することになった。きちんと記録し、情報を共有する。	地域の皆様からは、スタッフで自己評価に取り組んでいる、具体的な取り組みもできていると、確認いただいている。 地域での暮らしの支援や、人権の尊重として「成年後見制度」の活用について議題とする。利用するまでに、まだまだ理解が低い制度のような印象があるが、必要な人が、安心して使える制度になることで在宅生活をサポートできると意見がでる。	職場環境の整備、改善がつねに求められている。 介護記録のツールを変更した。業務の効率化、課題であった情報共有がしやすくなるはず。映像での記録も可能になり、ご家族に、より細やかに情報をお伝えしていきたい。特性を良くとらえ、業務に活かしていきたい。 職員に、外部研修への参加を勧める。スキルアップをすることで、業務の幅が広がり、職員一人一人の自信に繋がる。
B．事業所のしつらえ・環境	事業所としては、新型コロナウィルス感染症の感染予防として、現在の予防対策を継続していく。換気、手洗い、消毒など様々な感染症の予防にも通じると理解している。合わせて環境整備なども継続していく。今回の評価で職員も環境である事が再認識できた。話	今現在でも、感染症予防として掃除の徹底、職員の手指消毒など継続している。様々な感染症が存在している事を理解し、感染予防、拡大を予防するには、日常の環境整備が大事と考えている。	利用者のご家族からは、玄関は入りやすく、立ち話などもしやすいとご意見いただく。近隣の方からは、「外回りもきれいにしていますよ」とご意見いただく。「いつでも入って良いのかしら」と問われるが、ボランティアの方も来られるようになり、気軽に入ってい	事業所の建物内外が、この地域の環境の一部になっていると思う。掃除をきちんと行い、居心地の良い事業所にしていく。 いまだ、特別な用事が無いと入りづらいという印象があるようなので、職員もすぐに気づき、お声掛けするような、気安さをもって

	しかけやすい印象や、丁寧な対応など、職員全員が自覚をもって対応できるようにしていく。		ただけるようにお誘いする。 事業所の広報として、敷地内に掲示板を作ると良い。最新の情報を地域に向けて発信した方が良いと意見いただく。	いきたい。 掲示板は、事業活動の広報に役立つだろう。建物のオーナーに相談するなど検討する。
C．事業所と地域のかかわり	「生活支援コーディネーター」活動と共に、「要支援高齢者等の介護予防・重度化防止モデル事業」にも参加する。職員がより地域に出掛ける機会が増えていく。地域の高齢の方々の元気が続くための活動の提案や、気軽に相談事ができるような関係作りを行っていく。	「要支援高齢者等の介護予防・重度化防止モデル事業」を担う「ライフサポートワーカー」は、まだまだ地域との繋がりが少ない。地域を知るための活動ができるように、街歩きをしたり、人が集まりやすい場所へ顔をだすなどして、地域の方と顔馴染みになっていくことが必要と考える。	地域の行事に参加させていただいている。しかし、参加する職員が限定されており、外との繋がりが少ない職員もいる。地域の方にしっかり挨拶できているか心配なところもあると感じている。事業所の職員として、地域の方に、知って頂くように、ライフサポートワーカーとしても、地域へ顔を出す事をしていきたい。	「生活支援コーディネーター」と「ライフサポートワーカー」の活動を担う職員が、より自覚をもって活動できるようにする。地域の方々に「相談しやすい」と信頼していただくには、まずは顔を知って頂く。ひつじ雲の職員をいつも見かける、話しやすそうと感じて頂けるように、毎日の活動としていく。
D．地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み	日常的に、送迎時など、地域の方と顔を合わせる機会を持つ事を続けていく。新型コロナウィルス感染症の分類が変る事で、地域活動も少しずつ増えてくるものと予測される。ひつじ雲で送迎など一部サポートするだけでも、活動に参加でき楽しみが増える事を支援する。活動中は、知り合いの方に気にかけて貰えるような連携が取れるようにする。利用者の応援団を作っていく。	従来から、地域の活動に月に一度参加する利用者の方が一人おり、送迎を支援している。他の方に関しては地域活動の情報少なく、活動の幅を広げる事はできなかった。また、ひつじ雲から距離があると、その活動にご本人が参加できる状況をつくるのが難しいと感じている。 ひつじ雲周辺の町内活動には、ひつじ雲でサポートすることで参加できている。	感染症予防を理由に、外での活動を行っていなかった。基本的な予防を継続しながら、地域活動を行っていきたい。地域の行事も増えてきており、年末の餅つき大会には、つく人、食べる人として参加させていただいた。地域の開催する側でも、食べやすい大きさに作って下さるなど、ご配慮いただいている。神社のお祭りなど、古くからの行事に関わる事で、地域の一員であることの思いが強くなると思う。	今年は、利用者の方々と外での活動を増やしていく。 以前、地域活動として道路のゴミ拾いを日課にしていた。高齢になって支援を受ける立場になっても、誰かの役に立つと言うのは、私たちの誇りである。利用者の方々とそのような思いで、活動ができるようにともに過ごす。 地域の行事や、イベントの情報も積極的に得て、地域の一員として参加する機会を増やしていく。
E．運営推進会議を活かした取組み	運営推進会議は、事業所がどのような方向性をもって活動していくか、それが地域のニーズや期待にあっているかを確認するために、とても貴重な機会である。日常の中での関わりの積み重ねと共に、設問 F にある防災、災害対策は、運営推進会議の場で課題として取り上げ、検証を繰り返し突然の災害にもできるだけ対処	地域の方が参加して下さる推進会議は、この地域の課題を参加者全員で確認することができ、事業所として、できることは何かを考える良い機会となっている。今年度の議題の一つとして多く挙がったのは、「ライフサポートワーク」の説明と、協力依頼である。地域の方に理解していただくことが活動を行う上で大切と考え	ひつじ雲の職員を覚えてもらう場にしても良いのではとご意見いただく。全員が集まるのは難しいので、紹介ビデオを流したり、オンラインでの参加があってもよい。 堅苦しい会議形式でなく、例えば飲み会のような、くだけた場があると、話しやすくていいのではと、楽しいご意見もいただく。	地域で、心配な方として見守られている方について、一緒に話し合える場にしていきたい。この地域で暮らす方々が、日常でも災害時でも、地域を頼るように、ひつじ雲も頼って頂けるように、推進会議でひつじ雲の取り組みを伝えていく。

	できるようにしていく。	ている。		
F．事業所の 防災・災害対策	事業所の防災計画、及び訓練をもっと地域の方々にも知っていただけるように広報する必要がある。様々な災害が予測される現代、事業所のみで対処できることは限られている。地域の方々と事前の協力体制がとれていると大変心強い。 ハザードマップに即した、災害対策を整えていく。避難訓練など定期的に、計画書の見直しなど現実的なものにしていく。避難訓練に地域の方をお誘いする機会には、非常食の試食など実際に体験の機会を提案していく。	年 2 回の避難訓練を確実に行うこととする。第一回目は、事業継続計画書を職員が読み合わせをする事も、訓練の中で実施をした。年度末に第二回目を実施するが、推進会議の場で、日程や、非常食の試食会を開催する事を広報している。地域の方に参加して頂けるように、お知らせしていく。日ごろの訓練が大切と考えている。	避難訓練を行う場合、タイムを計り手順を決めて行うのがよい。訓練を繰り返し、時間の短縮ができるようになると良い。備蓄品の保管方法の話題となる。備蓄品を置く場所も地震などの場合被害にあうはず。棚を固定するなど、備蓄品がすぐに使えるような状態にしておかなければならない。充分な支援物資が届くまで、10 日分の備蓄が必要といわれている。	実態に則した避難訓練を確実に行っていく。備蓄品の管理をきちんと行っていく。期限の管理や、在庫品の管理をしっかり行う。 川崎市「個別避難計画」を作成する。要支援者の方に対して、避難計画を立てるために、どのような地域資源があるかを調査し、具体的な計画をたてるようにする。